

「挫折をも用いる神」

一使徒行伝講解説教 35一

使徒行伝 15章 36節～16章 5節

説教 本庄侑子牧師

聖書が証する神様は、人の思いを超えてお働きになる方です。しかも何ゆえか、教会に連なる私たちを通してです。用いられる私たちには欠けがあります。時にぶつかり、仲違いすることもあります。しかし神様は、それらをも巻き込んで、ご自身のわざを進めていかれます。

今日の聖書箇所からパウロの第二回伝道旅行が始まります。この旅を通して、福音はヨーロッパに広がっていきました。しかし当のパウロは、ヨーロッパまで伝道しようと思って旅を始めたのではありませんでした。一回目に訪れた町々の様子を見に行くつもりでしかなかったのです。しかし、そんなパウロの思いを超えて、聖霊がヨーロッパへと導いていきました。

今日は、そんな旅の出発の場面。パウロはここで、人間関係の挫折を経験しました。バルナバと仲違いして、旅を共にすることができなくなったのです。理由は、マルコを連れていくかどうか。マルコは前回の旅に連れて行った助手でしたが、途中でエルサレムに帰ってしまったのです。バルナバは、今回もマルコを連れて行きたいと考えました。一方パウロは、もう連れて行くべきではないと考えました。

二人は激しく衝突し、別行動をとることになりました。バルナバはマルコを連れてクプロに行きました。クプロは前回の旅でマルコも一緒に訪れた、バルナバの故郷でした。マルコにとって馴染みある土地で、しかもバルナバのいここでしたから、受け入れてもらいやすい場所だったでしょう。一方のパウロはシラスと旅を共にすることにしました。シラスはエルサレム教会で指導的な立場にあった人で、ローマの市民権も持っていました。ローマが支配する地で伝道するには有利な人物でした。そうして図らずも、それぞれに応じた場所が与えられ、これまで一組だったのが二組に分かれて、より広い範囲で福音を宣べ伝えることになりました。

その後、パウロにはテモテという新しい助け手も与えられました。聖書のもとの言葉では、16章1節には「すると見よ」という言葉が入っています。テモテとの出会いに驚き、励まされた、そんなパウロの息遣いが聞こえるようです。この時のパウロは、バルナバと別れたことで、まさか主の伝道がより豊かに進んでいくことになるなど、知る由もありません。本当にこれでよかったのかと後ろを振り返っていたかもしれ

ません。恩人バルナバを裏切ってしまったような私が伝道者として歩み続けていいものかと問うていたかもしれません。しかしそんなパウロの前に、颯爽とテモテが現れたのです。

テモテのおばあちゃんとお母さんは、前回の旅でパウロから福音を聞いて、キリスト者となりました。迫害の中で信仰を守り続けた二人を通して、テモテもキリスト者となり、評判が良いと言われるまでに成長していました。テモテはパウロにとってなくてはならない同労者となりました。神様は、大きな別れを経験した直後のパウロに、かつての伝道の実りを見せて励まし、しかも、ユダヤ人とギリシア人を両親にもち、ユダヤ人にも、ユダヤ人以外にも伝道して行くことができる助け手として出会わせて下さり、これからの旅に伴わせて下さったのです。

パウロは、テモテに割礼を授けました。救いに必要だからではありません。福音を伝えるためでした。これから行く町々で、より多くの人々に福音を宣べ伝えるには、ユダヤ人が集まる会堂に入って語る必要がありました。そしてそのためには、割礼を受けたユダヤ人でなければなりません。パウロは、ユダヤ人がテモテを通して福音を聞くことができるために割礼を授け、テモテもそれを受け入れました。自由の中で、これから出会う人々の救いのために、自ら不自由を選んだのです。

使徒行伝の後に収められているパウロの手紙を読むと、この後、パウロとマルコの関係も回復していったことが分かります。神さまは、最初の旅で挫折したマルコのことも見放さず、バルナバという理解者を与えてもう一度旅に出るチャンスを与え、その旅の中で成長させ、パウロと共に主に仕える者として下さいました。

神は憐れみ深い方。独り子を与え尽くしてまで、私たちを愛し、ご自身の栄光を表すために用いてくださるお方、私たちの挫折や罪よりも、もっともっと大きなお方です。挫折をも用いて、ご自身のわざを進めていかれます。そんな限らない主イエスの恵みに、礼拝ごとに立ち返らされては、献身を新たにされずにいられなくなる、そんな私たちを通して、今週も主は進んで行かれるのです。

(記 本庄侑子)